

教室から舞台へ

—— パフォーマンスを通しての実践的英語教育 ——

日 高 真 帆

1. カリキュラムに於ける英語ミュージカル公演の位置付け

京都女子大学文学部英文学科では2010年より実践的教育を重視した新カリキュラムが導入され、その一環として、卒業制作として英語劇の上演に取り組むプロダクション・ゼミが開設された。¹ この英語劇（主にミュージカル）の上演は、三、四年次でのゼミを通して取り組む卒業研究の成果発表として行われるものであるが、2014年2月に行われた第一期生による卒業公演以来、毎年四年次生のみならず二、三年次生も協力して参加する形で実施されて来た。具体的には、四年次生のゼミである卒業研究演習 I, II（2018年度からは Graduation Research Seminar I, II に改名）の履修生を中心に、三年次のゼミである専門演習 I, II の履修生（2017年度からは Advanced Research Seminar I, II に改名）やミュージカルに取り組む二年次の Listening & Pronunciation III, IV（Dクラス）、Research Seminar II の履修生がキャストやスタッフとして公演に参加して来た。

Advanced Research Seminar I, II（旧専門演習 I, II）と Graduation Research Seminar I, II（現卒業研究 I, II）が卒業研究に取り組むゼミ、Research Seminar I, II が二年次にゼミでの取り組みの基礎的な部分を体験学習できるプレゼミとい

1 プロダクション・ゼミでの演劇公演への取り組みについては、拙稿「英語劇の上演と大学教育への応用」（京都女子大学英文学会『英文学論叢』第56号、pp.10-16）を参照。

う位置付けなのに対して、Listening & Pronunciation III, IV (Dクラス) は英語科目という位置付けである。同じ二年次の Research Seminar I, II の場合、少なくとも現状では半期しか同一教員のクラスを履修できないため、後期に実施される卒業公演に参加できるのは必然的に Research Seminar II の履修生のみになってしまう。他方、Listening & Pronunciation III, IV は前期後期続けて同一教員のクラスを履修することが可能であり、学生達は一年間を通してリスニングや発音演習を多く重ねた上で卒業公演に臨み、その成果を披露することができる。本稿では、二年次からミュージカルを通して英語授業を展開する意義について、学生の実践例とアンケート調査を元に考察したい。²

2. ミュージカルを通しての英語授業

ー Listening & Pronunciation III, IV での取り組みー

Listening & Pronunciation III, IV は複数クラス開講されており、Dクラスのみがミュージカルに取り組むクラスである。³ 当該授業では、「発音・リスニングに関する教科書及び英語のミュージカル作品に取り組むことで発音やリスニング力を磨き、英語による自己表現力を高める」ことを目的としている。教科書としては英語の発音を丁寧に解説し、多様な発音練習やリスニング問題を備えたCD付きテキストを選定している。CD付きテキストを使うことで自主学习でも

2 バーナード・J・テイラーによるミュージカル作品 *Wuthering Heights* 及び *Pride and Prejudice* の日本初演公演については、拙稿「日本初演ミュージカルへの取り組みーバーナード・J・テイラー作品を上演してー」(京都女子大学英文学会『英文学論叢』第60号、pp.39-46)を参照。

3 ミュージカルクラスではない一般の Listening & Pronunciation III, IV も担当して来たが、それらのクラスでも英文テキストの暗記による朗読等発表を取り入れた発音指導に取り組んで来た。本稿で紹介するミュージカルクラスと取り組み内容が似通っている点もあるが、課題とする英文テキストが異なっており、一般クラスではミュージカルは扱っていない。一般クラスでの取り組みの詳細については、「平成28年度前期『京都女子大学学生アンケートによる優秀授業賞』の受賞について」で授業紹介を行った拙稿(京都女子大学FD推進委員会 *FD Information* 第25号、pp.2-3)を参照。

リスニングや音読練習に取り組み易いようになっている。

授業では、まずは「一人一人の学生のニーズに応える」ということを重視している。特に発音については個々人の課題にかなり相違が生じ易いため、履修生個々人の発音や自己表現力を磨くには、第一に各自の課題を確認することが必須となる。それ故、学期の早い段階で各自の発音の改善点を洗い出し、本人がその点を意識的に改善できるよう助言する必要がある。そのため、学期中に中間発表と期末発表の機会を設け、其々に於いて異なるミュージカル曲の歌詞を暗誦した上で歌うということを課題とした。これらは所謂「試験」としても位置づけられるものではあるが、「試験のための試験」ではなく、各自の発音を改善する上での実践的な「舞台経験」となるように、事前に「リハーサル」の機会を設けた。

尚、歌の授業ではなく英語科目であるため、希望があればミュージカルから抜粋したモノログやダイアログを課題とすることもある。評価基準も音感や表現力よりも発音の正確さや暗記の度合いに重点が置かれる。また、平常授業で発音指導とリスニング練習に主眼が置かれている点でも、音響・照明・字幕作成・衣装・道具類・舞台美術等ミュージカルの様々な側面について実践的に学ぶゼミやプレゼミ科目とは異なっている。

さて、先述の「リハーサル」では、課題曲の練習を複数回行った上で、歌詞の朗読を個別に聴いて発音上の問題点を分析し、各自が改善点を意識できるように分析結果を詳細に伝えてより良い発音に向けての助言を行う。履修生も多いためこのような指導法は時間が掛かるが、一人一人の発音の特徴や課題が異なる以上、その点を各自が認識した上で学習を進めなければ同じ過ちを繰り返し、不要な癖を放置・助長することになり兼ねないため、敢えて行って来た。

また、個人指導以外にも、発音練習とリスニング練習が相乗効果を発揮して英語力を高められるよう工夫し、ペアワークによる音読練習や歌の練習に取り組む時間も頻繁に取るよう心掛けている。特に音読や暗記の重要性を認識していない学生が多いため、正確な音読練習や暗記訓練の日常的な積み重ねの大切さを伝え、自習に於ける音読や暗誦の習慣化を促して来た。

そうする内に、授業開始時に教室に入ると、そここから声を出して課題曲を練習している声が聞こえて来る程、学生達も自発的且つ熱心に取り組むようになった。中には、苦手な発音をどうすれば正確に発音し易くなるかについて自分で方法を編み出し、同じ課題に取り組む他の履修生に伝授する学生もいた。また、ある時廊下を歩いていると、授業をしていない教室からミュージカル曲を歌う声が聞こえて来たため上級生が自主練習をしているのかと思って覗いて見ると、二年次生が一人で課題曲の練習に取り組んでいたこともあった。話し掛けてみると、個人指導で注意された発音を意識し乍ら練習を繰り返していたとのことであった。このような学生達の日々の努力もあり、例年複数回の個人指導や発表を通して学生達の発音に様々な改善が認められている。

3. 英語ミュージカル公演との関わり

さて、前述の通り、Listening & Pronunciation III, IV では履修生が希望した場合には卒業公演に参加することができる。二年次生の場合、コーラスとしての参加が最も多いが、複数の役割を担う場合もある。以下で公演写真と共に具体例を紹介する。



公演写真1： *Wuthering Heights* (2016)より



公演写真2 (左) :
Wuthering Heights (2016)より



公演写真3 (右) :
Pride and Prejudice (2017)より



公演写真4 : *Pride and Prejudice* (2017)より



公演写真5：Pride and Prejudice (2017)より

公演写真1は2016年2月に行った *Wuthering Heights* の公演に於いてコーラスとして参加する2015年度のListening & Pronunciation III, IVの履修生達である。公演写真2は同公演の別の場面において嵐が丘の召使い役で登場した当時の二年次生である。公演写真3～5は2017年2月に行った *Pride and Prejudice* の公演時のものであり、2015年度のListening & Pronunciation III, IVの履修生達が三年次に主要登場人物として出演している様子を捉えている。

写真1の右端の学生は四年次生の演じるベネット家次女のエリザベスの相手役として、写真3の左手でウィッカムを演じている。写真1の右から二番目の学生は写真4の右から二番目でベネット家四女のキティ・ベネットを演じている。写真2の左手の学生は写真4の左から二番目でベネット家三女のメアリー・ベネットを演じている。写真2の右手の学生は写真5中央でキャサリン夫人を演じている。今年度の公演は二月のため今年度の写真はまだないが、これら二回の公演写真を比較するだけでも、一年間で彼女達が如何に成長し、表現力を

向上させたかが如実に伝わって来るようである。

勿論 Listening & Pronunciation III, IV を履修した学生が全員プロダクション・ゼミに入る訳ではない。例えば、写真1でコーラスを演じている学生の内、左から一番目、三番目、四番目の学生達は他のゼミに入り異なる専門領域について学んでいる。他方、当該授業を履修していなかったがプロダクション・ゼミで活躍している学生達も大勢いる。二年次前期に Listening & Pronunciation III を履修して発音を磨き、後期は留学して帰国後夫々の専門の道へ進む学生達もいる。

そのように多様な関わり方をする学生達がいる訳だが、彼女達は本授業にどのような意義を見出して来たのだろうか。昨年及び一昨年に本授業を履修していた学生達を対象にアンケート調査を行ったため、次に実際の履修生からの声を紹介したい。

4. 履修生達の声

— Listening & Pronunciation III, IV での取り組み—

アンケートの質問事項は以下の通りである。

1. ミュージカルを通してリスニングや発音に取り組むことが英語学習や英語力向上に役立ったと思いますか？
2. 1について、役立った場合、どのように役立ったと思いますか？
3. Listening & Pronunciation III, IV を履修して有意義だったことはありますか？
4. 3について、有意義だったことがあった場合、どのようなことでしたか？

アンケートを依頼できた四年次生七名と三年次生十名の内、其々三名と七名から回答が得られた。設問1と3については回答者全員が肯定したため、設問1-2と設問3-4に関する実際の回答を夫々纏めて引用して紹介したい。

設問 1-2 の回答例：

「発音をより意識することができるようになったという点で役立ったと思います。普段の生活では私は発音に関して意識することが少ないのですが、ミュージカルをすることにより台詞や歌詞を正確に伝えなければならないという考えから、それが発音の練習や学習をするモチベーションに繋がったし、自分の発音の間違っているところを積極的に改善しようとするようになりました。」

「机の上で勉強するより、実際に使って勉強するのが好きな私には大いに役立ったと思います。熟語や言い回しの語彙力が増えたので、読書や会話、ドラマや映画を観る時に役に立っています。」

「先生が自分の発音の癖を指摘してくれたので、自分の発音の向上に繋がりました。今でもそれを意識しています。」

「ミュージカルが好きなので、テキストに向かうよりも楽しく英語に日々触れることができた。作中、繰り返し出てくる単語がいくつかあったので自然に覚えることができた。また知らない表現を学ぶことができた。」

「自分の好きなミュージカルを通してやることは、英語学習に対する意欲の向上に繋がりました。楽しみながら学習できたため、自分から発音練習しようと日頃から意識するようになりました。」

「ミュージカルの内容理解のためにわからない単語を調べ覚えるきっかけになりました。また、国による英語の発音の違いも実際に聞いて感じることもできたと思います。ミュージカルの中で文化を知ることができたと共に、感情をどう英語で表すかも意識して観るようになりました。」

「ミュージカルを通して英語を学ぶことの利点は何よりも楽しんでできること。また、今までそこまで発音上達の必要性を考えていなかったが人に伝えるということを考えてときに発音をもっと良くしなければならぬと認識を改めるよききっかけになった。実際の英語話者の方を真似するという事は発音上達の近道であると思うし色々な作品に触れることでその分野への興味がどんどん膨らんでいったと思う。」

「歌や台詞を練習する際、耳で聞いて声にも出して行うので、英語が自然と頭に入ってきやすくなり、語彙力や発音の向上に繋がったと思います。また、歌ではリズムに乗せて英語に触れられるので楽しく英語学習ができました。台詞練習で、普段他の授業ではあまり学ぶことのない少しくだけの会話表現等も知ることができ知識が広がりました。」

以上のことから、「人に伝える」ということへの意識の高まり、「伝わる発音」を修得しようという動機付け、自習への積極性が読み取れる。また、楽しんで英語学習に取り組めるということも学習意欲を高める支えになっていることが分かる。更に、「歌や台詞を練習する際、耳で聞いて声にも出して行う」という回答によく表れているように、リスニングとスピーキング・発音とを一体化させて学べていることも分かる。ミュージカルで描かれる世界を通して、英語の発音の多様性や背景にある文化についても学びが広がっている様子も見て取れる。

次に設問3-4に関する回答を纏めて紹介したい。

設問3-4の回答例：

「2回生の時から公演に参加させて頂けたことで、上回生の方々と親しくなれて縦の繋がりを作ることができたこと、また大勢の学生で1から一つの舞台を作り上げることの達成感や充実感を得られたことが特に良かったと思います。」

「2回生の頃から、卒業公演に参加することができて良かった。先輩とのつながりができて良かった。」

「卒業公演にゼミに入る前に参加できたので、特にスタッフワークはどんな役割があるのか等知れて良かった。2年生までの英文の授業は個人プレイのものが多かったが、公演はみんなで作り上げていくものなのでゲスト参加ではあるが達成感が大きかった。」

「先輩・後輩とのつながりが出来たこと、仲間と協力する経験が出来たこと、しばらく離れていた合唱をまたやれたこと。」

「発音練習をする機会が増え、LやRの違いなど、細かい発音の仕方も学べました。そして、ミュージカルをどうやって作り上げるのかを体験することができて楽しかったです。元々、ミュージカルゼミを希望していましたが、卒業公演に参加させて頂き、より気持ちが強くなりました。また、同学年とも先輩とも深く関わることができました。中高の部活のように、大学で先輩後輩関係なくみんなで協力して何かを作り上げるという経験ができてとても充実していました。もちろんこれからの2回の公演も楽しみです！」

「有意義だと感じた点はいくつもあります。その中でも特に、卒業公演に関われたことです。このことにより、同じ学科の先輩方と出会えたり、来年度はどのように準備を進めていこうか等、来年度へのイメージが湧きました。また、先輩方のように頑張ろうと意欲向上に繋がりました。授業では、ひとりひとり丁寧に発音を見ていただくことで、自分の癖を知ったり、次への課題も発見することができたため、自分の成長に繋がりました。」

「私は留学に行ったので2回生時点で当時の先輩の公演には携われなかったが周りの子たちを見ていると、先輩方と関わり、その雄姿をみたうえでプロダクションゼミに臨むとき私たちもやるんだという意欲が全然違うと思う。私もそんな子たちにひばられて、今年は積極的にプロの劇団の公演を見に行っているし興味関心の高まりを感じる。また、学生生活の最後を、みんなで何か一つのことを作り上げて締めくくれるというのは本当に有意義なことだと感じる。」

以上の何れの回答にもあることは、学生同士の繋がりの大切さである。クラスメイトのみならず他学年の学生とも協力し合って一つの舞台を作り上げる中で得られる充実感が支えとなり、堂々と活躍する先輩の姿を間近に見ることで

向上心や学習意欲が高まっている様子が窺える。学年を越えて協力し合い、一つの舞台を作り上げることが、英語学習や演劇教育という枠組みを越えて学生達の学びに豊かな広がりをもたらしていることが分かる。

5. 教室から舞台へ

以上のように、Listening & Pronunciation III, IV では、教室で「リハーサル」と「パフォーマンス」を複数回経験し、多くのグループワークも経てクラスメイトからも刺激を得ることができる。更に、年度末にはホールでの公演リハーサルを経て舞台上で本格的なパフォーマンスを経験することができる。公演への参加を希望した学生は、授業内リハーサルとパフォーマンスで修得した歌を最終的には約200人もの観客の前で披露するのである。そうした経験を通して英語の歌が身に付き、発音への意識が高まるばかりではなく、舞台経験を通して学習上様々な刺激を得ることができる。アンケートからも明らかになったように、その一つが先輩から受ける刺激である。キャストやスタッフとして活躍する先輩の姿は身近な目標として更なる学習の動機付けになるのである。それを象徴する出来事として、今年度の演目について現四年次生と話し合った際、二年次に初めて経験した *Wuthering Heights* を、自分達の卒業公演として是非上演したいと強く希望したことが挙げられる。二年前の公演写真1及び2でコーラスや召使い役であった彼女達は今年、二年前に憧れていた先輩達が担っていた役を担い、リハーサルやスタッフワークで後輩達を牽引している。⁴ 彼女達の舞台での「雄姿」はまた新たな後輩達の目標となっていくであろう。

昨今活発に行われているFD活動では、教員相互の授業参観や授業の実践報告等が多く行われている。教員間で刺激を得合うことは勿論有意義なことと言

4 写真1の左手より二番目の学生はアーンショウとエドガー・リントンの二役を演じ、五番目の学生はイザベラ・リントン、六番目の学生はヒースクリフ、写真2の左手の学生はキャシー、右の学生はネリー・ディーンを演じる予定である。また、写真1の左手より一番目、三番目、四番目の三人はスタッフとして今年度の卒業公演に参加する予定である。

えよう。しかし、そこから視点を反転させて、教員同士ばかりでなく学生同士如何に刺激し合えるか、ということを検討すると、授業を一つのきっかけとして学生の学びの総体に一層広がりとお行きをもたらし新たな道が開かれるように思われる。通常授業で教員が学生に関われる時間は一週間で一時間に過ぎない。その時間内にどれだけのことを盛り込めるのかを工夫するのも大事だが、その一時間を契機としてその時間外の、教室外での学生の学びを如何に豊かなものにできるかを考えることで学生の学びの総体は大きく変わり得るのである。音読・暗誦の習慣化や各自の発音に対する意識啓発、勉学の枠を超えた楽しめる教材の提供、そうしたものは自習時間の充実化に大いに繋がる。更に大きな力となるのは、クラスメイトや先輩から得る刺激を契機とした学習意欲や向上心の高まりである。

ミュージカルを通して英語授業を展開する意義に関する以上の考察から、今後の展開として、Listening & Pronunciation III, IV のような授業が一年次にも設置される意義も明らかになったように思われる。初年次から履修できるようになれば、もっと早くから学生同士刺激を受け合い、早い段階から自発的学習を習慣化させ、大学での専門教育に繋がる形で英語学習を深める一助になるのではないだろうか。教室内の取り組みは勿論のこと、教室外での学生達の意識と意欲を考慮した授業設計を心掛けることで、学生達夫々の未来の舞台での活躍に繋がるより豊かな学びがもたらされるような教育活動を今後も心掛けて行きたい。

謝 辞

本稿は、2016年2月の公演 *Wuthering Heights* 及び 2017年2月の公演 *Pride and Prejudice* の出演者の写真及びアンケート調査を元に行っています。公演写真の撮影はヤスタ写真館様にご担当頂きました。写真に写っている出演者は公演写真1左手から順に中野鈴穂さん、信原莉菜さん、岡田実華さん、中野加奈子さん、野田菜有さん、菅遥華さん、清水祐衣さん、南部晴香さん、関口愛さん、

佐藤由里菜さん、平田奈々穂さん、北川恵里加さん、今仲彩友さん、黒瀬沙耶香さんです（複数回写っている場合は初出時のみ氏名を掲載しています）。ご協力有難うございました。

参考資料

- Taylor, Bernard J. *Pride and Prejudice*. Libretto. www.bernardjtaylor.com, 1994-2006. Print.
- . *Wuthering Heights*. Libretto. Horsham, West Sussex: Stagescripts, 1990. Print.
- . *Bernard J. Taylor's Pride and Prejudice: A Musical Based on the Novel by Jane Austen*. Dress Circle, 1994. CD.
- . *Wuthering Heights: The Musical*. Silva Screen Records, 2003. CD.
- Pride and Prejudice*. By Bernard J. Taylor. Dir. and Piano. Maho Hidaka. Bunchu Hall, Kyoto. 3, 4 Feb. 2017. Performance.
- West Side Story*. By Arthur Laurents, Leonard Bernstein, Stephen Sondheim, and Jerome Robbins. Dir. and Piano. Maho Hidaka. Bunchu Hall, Kyoto. 3 Feb. 2014. Performance.
- West Side Story*. By Arthur Laurents, Leonard Bernstein, Stephen Sondheim, and Jerome Robbins. Dir. and Piano. Maho Hidaka. Bunchu Hall, Kyoto. 4 Feb. 2015. Performance.
- Wuthering Heights*. By Bernard J. Taylor. Dir. and Piano. Maho Hidaka. Bunchu Hall, Kyoto. 2, 3 Feb. 2016. Performance.